岩波講座「地球環境学」

編集室から――10

最終回配本(第2巻)　1999年5月

――いよいよ最終回です．2巻編者による豪華な対談をお楽しみください．

米本　個人的には，井上民二(第5巻編者)がいないのが大変残念ですね．

安成　3人とも京大山岳部の同期だった．彼が亡くなったサラワクにも行ったけど，現場で研究して，なおかつ地球環境の構想を考えてたのはすごい．結局1960年代の大学闘争の時にわれわれがした問題提起が，今やっと市民権を得てきた．あの頃の意識は先鋭的で，ぼくの原点はそこにあるし，井上もそうだったと思う．

米本　あなたの立場での研究の原点ってどういうこと？

安成　あの時学問批判やったじゃない．学問が人間にとっていかに意味があるかとか，この巻でも書いた，近代合理主義の権化としての研究に対して．科学，特に純粋な自然科学では，自然は普遍で客観的な対象で，無限に分析できることが前提．それで面白くてハッピーならいいけど，地球は一つの閉じた世界だから，そんな前提では対応できない．地球環境問題でそれが突出してきた感じがします．そやけど当時は解がなかった．帝大解体なんて言いながら，翌年には大学院受けたりして…あなたはちゃんと外に出たけど(笑い)．でも，問題意識は心の底にずっとあって，今は30年前の問いかけに具体的にどう答えられるかという局面に来た感じがしてるんです．

米本　この講座で，30年前の不満というのはうまく実現されてるわけ？

安成　むつかしいね．これまでの科学の枠組みで書いてる人もいるけど…

米本　ぼくは分不相応に編者もやらされたけど，書く側とすれば，地球環境学とはいえ，旧来の地球科学の解説書としても書ける．そこを，自然観，科学観，あるいは文明観に対する解答として，そこまで明確でなくても，素材の並べ方や課題に書き手の考え方や人生観を滲み出させている人は…

安成　かなり多い．はじめに講座のタイトル考えるときに議論があった．地球環境工学とか地球環境科学とか．ぼくはそれは反対したんです．やっぱり工学でも農学でも理学でもない，地球環境学そのものという形で，それぞれの立場の視点でまとめるべきじゃないかと．たとえば，2章の岩田氏は，非常に純粋に自然科学的に書いてるけど，そこに彼が自然地理学者として地球環境をどう捉えるか，という視点を出している．いろんなスタンスの違いはあるけど，かなりの人がそういう意識をもって書いたのが，この講座の良かったところかな．

米本昌平先生

米本　入れ物としてはそうですよ．

安成　たとえばCO_2の規制を考えても，必ず価値観は入るわけ．われわれが60年代当時の教授に問いかけたのは，ええかっこで言えば，己の価値観，思想が，おまえの研究にどう出てんだ，と．それに対して，研究では自然現象に対して心を空しうすべし，変に価値観なんか入れるのは邪道であると．これが近代合理主義，日本でも明治以来続いた学問のパラダイム．それはそれなりの成果を出したけど，問題も出てきたわけでしょ．学生の頃一番問題だった公害は，はっきり原因がわかってて，それさえ解決すれば終わり．それに対して地球環境問題は，たとえばまずCO_2出すのがいかんのかという話がある．結局われわれの担っている文明，世界そのものの仕組みで出てくる矛盾でしょ．そこで価値観が問われることになる．

米本　あなたが何のための学問かと言った30年前に，その前提には体制・反体制という図式があった．ぼくなんかはそれは確かにそうとしても，そこから一歩引いて，科学の客観性・合理性そのものが歴史の産物なのかもわからないと．それを実証しようとして全く独学で科学史に入ったんですけど，30年たってみると，もう体制・反体制とか関係なく，人間がこれだけのすごい文明を地球上に展開するというのはすべてが共犯関係であると．むしろそれを認めて，自然をかつての純粋な自然ではなく，われわれがすでに影響を与えてしまった自然として理解して，その上でわれわれの作法なり居住まいなりを正すべきではないか．そういう覚悟，メッセージが地球環境学というなかに入っていて，それなりに書き手は格闘してますから，おもしろいですよ．

安成　最近になって，各大学の新しい研究科とか学科の名前が地球環境学になってる．科学をつけると人間活動や生物・農学・工学が絡むところが切り落とされて，それでは地球環境は議論できないという意識がかなり市民権を得てきている．そういう意味でもこの講座のタイトルはよかった．ぼくらが大学入った頃には，そんな怪しげな学際領域なんてのは年寄りがやるもんだとか，そういう雰囲気だったんですよ．死んだ井上が言ってましたけど，これからは気象学とか生態学とかそんな出身にこだわらずに地球環境をやるんやという学生がでてこないとアカンと．これは非常に卓見だったと思います．ただ問題はね，確かに地球環境

やりたいという学生はものすごくふえているんだけど…というのはここでもあえて科学とせずに学としたというところに関係するんやけど，ほんまに地球環境のことやるなら，自然観，地球観とか，人間観も含めてね，結局それが問われる．おまえほんまにそこまでやる気あるんかなっていう，そこなんですよ．これは就職が多そうだとか(笑い)，この分野が流行だとか，いわゆる旧来の学問分野のイメージで地球環境をやるんだったら，それはやめたほうがいい．おまえにとって，俺にとっての地球とは何か，それを常に考えるのが地球環境学や．ていう具合に言ってる．学生もわかったようなわからんような顔するけど(笑い)．

安成哲三先生

米本　しかし，ぼくはほんとに絶望しちゃってるな，若者には．

安成　ちょうど子供がその世代なんだけど，今の日本の受験体制は問題ですよ．たとえば地球環境がこれだけ大事と言われても，地学，地理学，物理，化学，生物と，みんな旧態依然の入試のための勉強にとじこめられてる．ひどい高校になると，時間がかかる理科実験なんてやめちゃって，受験に必要なことしかしない．それで実際の自然をほんとに知らない．われわれも受験世代だったかもしらんけど，ぼくなんか一番自然を感じたのは山登ってたから…

米本　(笑い)いやぼくもそう．

安成　意外とそういう即物教育って大事なんですよ．別に山でなくても，井上は中学校のころから虫が好きだったとかね．何でもいいと思うんですけどね，対象は．大学に入ったとき，ウィルソンの霧箱を高3の時に自分で作ったというやつがおって，えらいなーと．そういうの大事だと思う．ぼくは中学高校の時から山行ってて，そもそも理学部行きたいと思ったのは，山や探検ができる学問はないかなと．そんなこと今の受験体制ではできなくなっている．一番良くないと思うのは，日本では人気があって，難しい学部，学科がいい学問なんですよ．やさしく入れるところはだめな学問．入試のときもそうだし，一般的にそういう見方があるじゃないですか．もっと居直ったらいいんですけど．今の受験生の多くは，何がやりたいかよりも，偏差値で動く．自分の成績ならここ，よかったら医学部行くかとか．それは問題だということで，最近出口を難しくするとかいってるけど，やっぱり入口を根本的に変えないと，ほんとの意味でいい学生は出てこないんじゃないかな．と，えらそうなこと言っても，結局ぼくも近代合理主義の学問を相変わらずやっているわけです．研究者としてやっていくには，やっぱり論文書かないかん．論文は学会誌で評価されるでしょ．そこにレフェリー制度があって，学会の価値観にあわせてないと，研究者として生きて行けない面もあるんですよ．だけど逆にね，落とされるような論文こそほんとは価値があるという側面もあるんですよ．学会にどっぷりつかって生きていると，ある枠を絶対出られない．その枠を超えようと思ったら，落とされても別で出すとか，根性もってやらないと(笑い)．その根性があるかどうかも問題で，けっこう大変なんですよ．

米本　ぼくはそういうのと最初から一切関係なくて，立場上日本の研究者社会のはじのはじにいて，主として遺伝子組替えの規制の問題などをやってたんですけど，地球環境問題もやれと和田英太郎先生(編集委員)にいわれて(笑い)，上司だったから．それで表向きはいやいや，本心はにこにこして，まっすぐ行ってれば生命倫理とか医療政策の大家(笑い)になったのに，それを若い人に渡して，成功する保証もないまま地球温暖化問題に首つっこんでいったんです．それで岩波新書一冊であっというまに地球環境問題の専門家になっちゃった(笑い)．

安成　あの新書で，気象庁も地球温暖化問題は米本さんにお話聞きましょうと．

米本　うそ八百，新参者なんだよ．

安成　これは逆にいうと，地球環境問題について日本にラジカルで本質的な問題を議論する人がいかに少ないかということの証明でもある．

米本　というよりも，自然科学者は，価値とか政治・政策というのは，自分たちに関係ない，それは政治家のような連中がやることであるというふうに，科学者集団およびそれが信じている研究対象とそれ以外のところに，ものすごい段差を作るわけ．ところが世界中を見れば，こっちが本物の研究でそれ以外は二流と勝手に線を引いてるのは先進国の中で日本だけ．地球環境戦略と称する膨大な研究が英語圏では90年代に入って山のように出てるんだけど，そのレポートを読んで力を得て，国際交渉にまで首をつっこんで，あの新書を書いたわけ．政策立案の前提となるような意識を持った地球環境問題への接近というのは，先進国では優秀な研究者が参入してるのに日本だけはなぜか政治はむつかしいからとか…

安成　まさに今ぼくがいいかけたのはそこでね，30年前の学生運動の中で，われわれ学生は研究者を批判して，専門バカと言ってた．おまえ研究ばっかりできても他のことは何も知らんではないかと．専門バカが特に自然科学は集まってるんですよ．だから地球環境学みたいのはなかなか育ちにくい．ぼくがあえて地球環境学で，これから仕事したいと思ってるのは，30年前の問いかけを，ちょっとずつでもいいから自分で答えていかなしゃあないのかな，ということなんですよね．